

## 結 語

### 東 聖子

日本の高等教育において、つまり大学・短期大学において、WHOが提唱したライフスキル教育が授業形態に全般的に取り入れられるところはまだ少数派である。2012年度の本学短期大学の初年次教育「基礎ゼミ」において、オリジナルな十文字バージョンとしての、キャリア教育と知的学習教育を内容としたライフスキル教育を展開することが、この共同研究すなわち本論考作成の目的であった。

時代や世相に対応しすぎることは、学問の真理探究という立場上はいささか疑問である。また、ライフスキル教育の中で、そこから零れ落ちる学生たちの貴重な個性の輝きをどう磨いていったらよいのか、考慮の余地もある。社会教育については、江戸時代初期の『長者教』において、「福の神」の名前として、以下のようにある。

ふくのかみ十人御子

たくわへ太郎、たねもち  
 あさおき二郎、むねきよ  
 さんよう三郎、かねます  
 うちゐ（内居）の四郎、いゑよし  
 五じやう（五常）五郎、なをます  
 えしゃく（会釈）六郎、ためよし  
 ありあひ（有合）七郎、むねやす  
 しんしゃく（斟酌）八郎、すゑよし  
 ものこらへ（耐乏）九郎、しげよし  
 こころだて十郎、すゑたか

社会的な成功者の心得には、現在との共通点もあるようである。では、現在のグローバルスタンダードとしての次世代に求められる人材は如何なものであろうか。日本教育大学院大学熊平美香学長は以下のようなことを学校生活を通じて学ぶ必要があるという。

- (1) パーソナルマスタリー（客観的自己認知に基づく一貫性のある生き方）と人生の目的
- (2) 軸となる倫理観や信念
- (3) 専門性の土台となる基礎学力と思考力
- (4) 他者との対話を通じての問題解決や価値創造

#### (5) 主体性と協調性の融合

また、熊平氏はOECDが提唱している「継続的に学習し続けることの重要性」をも述べている。さらに教師は自らがモデルとなり、「生きる力」「社会人基礎力」「学習し続ける力」を高め続けることが大切であるとも語っている。

以上のように、時代によって、民族や社会によって、望まれる人間像は異なっている。新学科の「基礎ゼミ」におけるライフスキル授業は、学生たちの資質をよく認識する必要があるだろう。柔軟性のある、方法論や手段としてのライフスキルが必要なのである。そこに盛るものは、遊びのように自由な発想と柔軟性のある、学生の個性が豊かにいきいきと輝くためのスキルである。

しかしながら、グローバル化した現代社会のなかで、時代の混迷に萎縮することなく、青年期にのびのびと「尊厳のある人間力」を体系的に修得することは、大学・短期大学の初年次教育にとって是非とも必要なことである。その折には、知的生産の技術の基礎的な方法論の学習も加え、時間管理能力の修得をも加えて、ロールモデルとしての卒業生のメンター制度も活用しつつ、十文字短大のオリジナルなライフスキル授業を、試行錯誤と教員同士のFD等の活性化のなかで実現してゆきたいものである。